

第四十三章 応神天皇 (中)

宗像神社

今一度、詔を曰辛卯年(三三一)に戻そ

三韓(新羅・高句麗・百濟)を 平定し

た倭軍は、内官家宅倉を定めると下——帰途

についた。(紀) 三国それぞれに

姫を奉戴しつつ、倭の兵達は曰高句麗に

ら曰百濟を経て、曰加羅を経ていたた

び曰新羅にへと到った。

新羅王の門には、あの矛が輝いていた。

尚、広開土王碑に刻まれているように、

高句麗の属民であった百濟・新羅は、

曰辛卯年(三三一)以降、倭の臣

民になったのであろう。

倭国の軍船は、曰新羅を後にし

一路、海のかなたの曰倭国を目指した。

海原は、いつになく穏やかだった。

兵達は、勝軍に酔いしれ、倭国へ還る喜

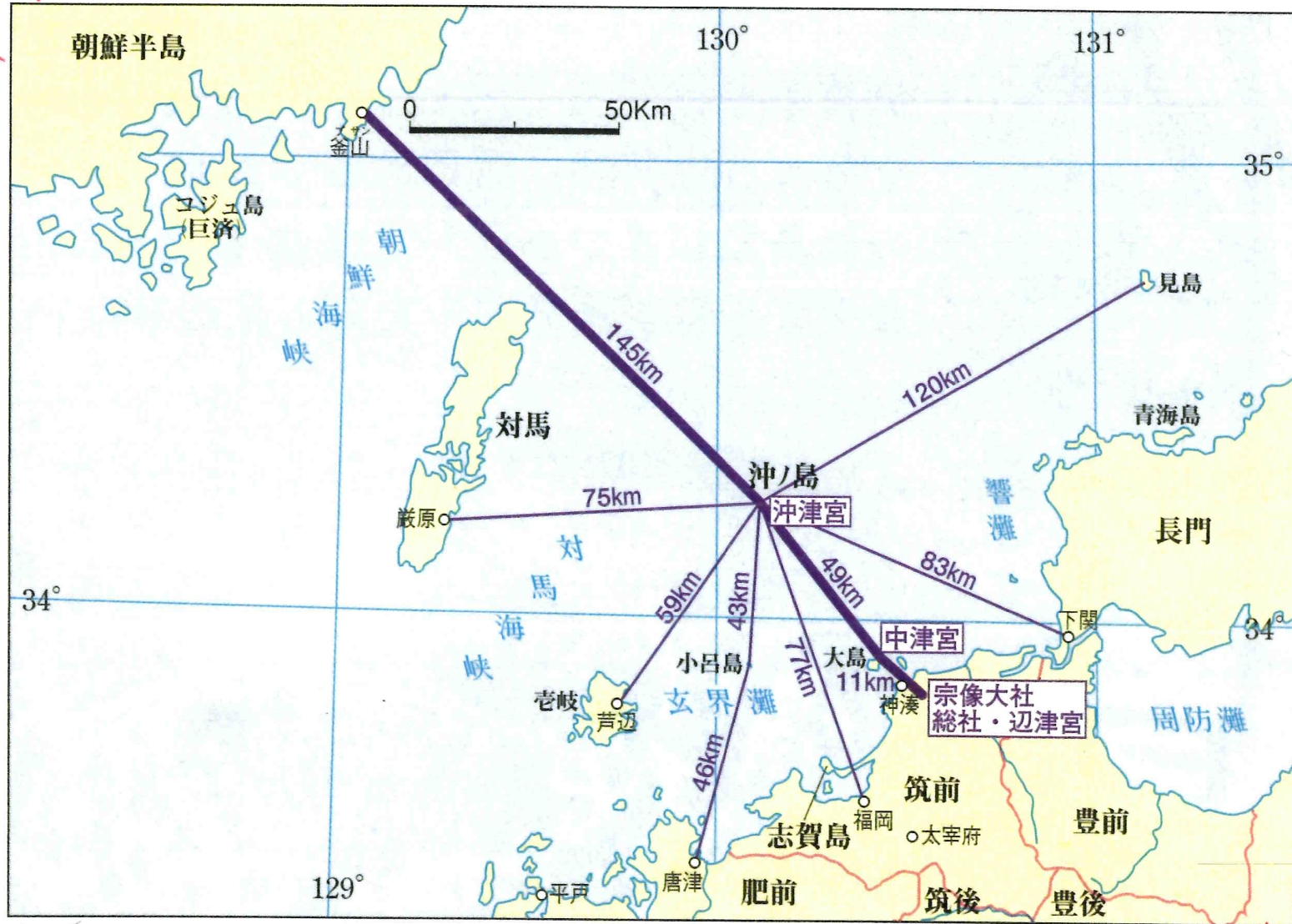
びに心を躍らせていた。

黄色い大きな軍旗をはためかせながら、

2,559P-2/9

外枠トリ

・カラー
・左頁の上半分。
左右大きく
はみ出して
掲載下さい。



146G 中ページ

第330回

海上交通の重要地「沖ノ島」から各地への距離

126G

周囲4kmの岩山からなる沖ノ島は海の道の重要な中継点であった。

13QG 中ページ

『地図でめぐる神社とお寺』武光誠、帝国書院、平成24年7月12日発行、145頁参照、242

外枠トリ

2,559P-3/9

・カラー
・左頁の下半分、
大きく掲載下さい。



金製指輪



こんどうせいりゅうとう
金銅製龍頭

背景の
右側はママ

下の背景(ブルー)を
トル

中心よりわけ
14 QG

写真図版414

「海の正倉院」と称される“神宿る島”

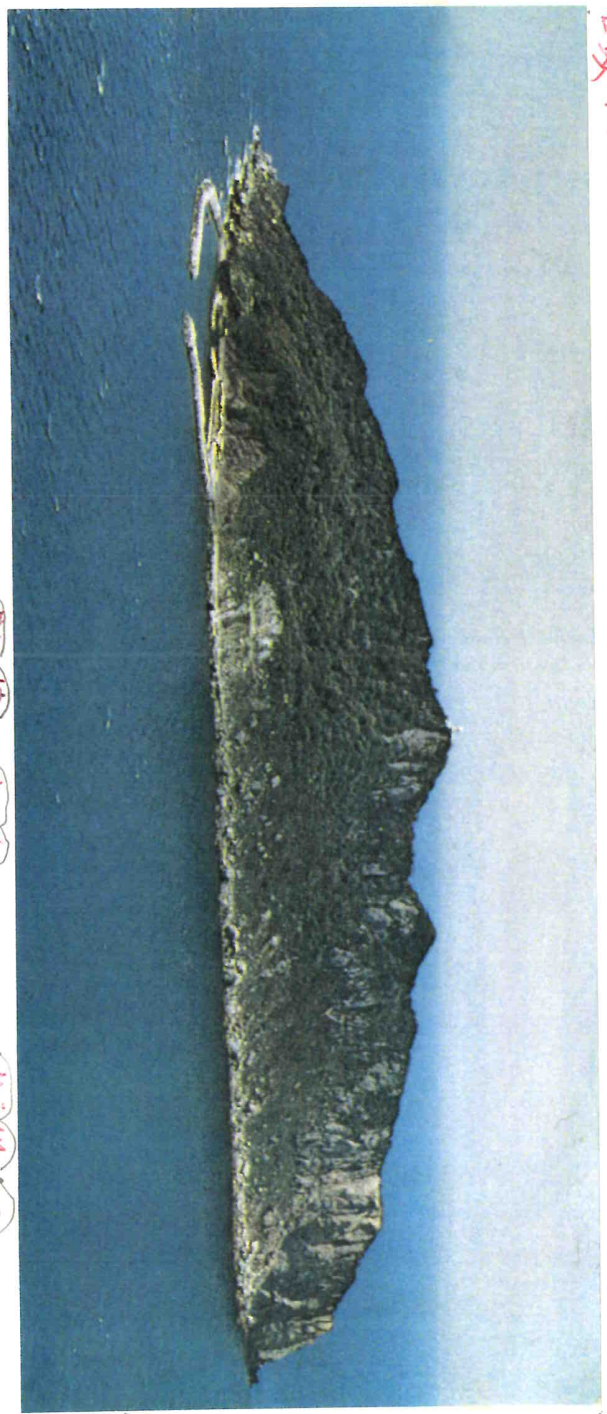
- ・ 沖ノ島で1954年から数次にわたって行われた学術調査により中国や朝鮮からの豪華な舶載品が出土し、沖ノ島は「海の正倉院」と呼ばれるようになった。これらの出土品は、~~総社~~ 辺津宮に建てられた神宝館に納められ、約8万点におよぶ国宝が所蔵・展示されている。

12.QG

13.QG

『^{たけみつまこと}地図でめぐる神社とお寺』武光誠、帝国書院、平成24年7月12日発行、145頁参照。

カ-1の全面に上下の母杵を
右向き掲載下さい。



④4979P 宮澤神社
神宮 裸での観望 大塚 1854-75

1404 写真図版 415 南東側から見た『沖ノ島』〔祭祀遺跡群が往時を伝える島である〕
1204 沖ノ島の三股止場は島の南立前にある。

2559p 4/9



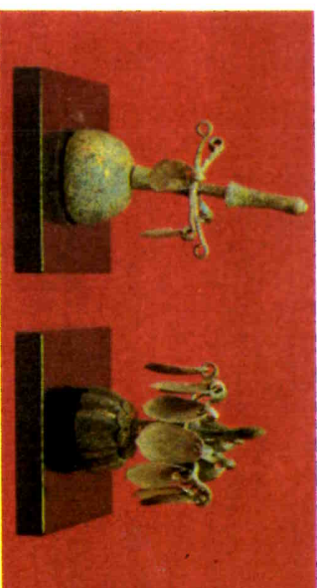
ミナミ 西ニ面
244

1404 写真図版 416 『三角縁神獸鏡』〔国宝〕(中国魏の時代の作といわれる)
1304 → 『日本100の神社』JTB 日本交通出版社(事業局) 1988年11月1日発行 134頁参照。

・カラーの1頁全額
左側に掲載
下さい。



国宝指定を受ける滑石製の子持勾玉2箇



金銅製雲珠。いずれも国宝

ニニは、空白

2,559E5/9



遣唐使が持ち帰ったという唐三彩長頸瓶



古墳時代のものとされるガラス製玉類

245



半岩陰半露天祭祀の5号遺跡。唐三彩などが出土している



重文の木造狛犬一対。高麗狛とも呼ばれ、鎌倉期の作という。粗く素朴な造ながら力強く太い線の線、ふんばった四肢、顔の造作などに明朗で豪快なものが感じられる。かつては辺津宮の本殿前に鎮まっていたと伝わる

1409

聖蹟版 417 沖ノ島祭祀遺跡・遺物

1309

『日本1000の神社』JTB 日本交通出版社出版(株) 1988年11月1日発行 134頁参照。

遺跡は4段階に分かれ、第1期は4世紀後半から5世紀半ばまで、----第4期は9世紀末で終了(※ヒメアサヒ500年以上もの長期間、沖ノ島の祭祀は継続された)。

七手持の神

・カラー
・右頁上半部に掲載下さい。

2,559^円 6/9



140^円写真図版 418 太島の北側、海に面した地に鎮座する『中津宮』の《沖津宮遥拝所》
12⁰⁰・好天のときは、沖島がはるかた望まれる。

130^円『日本100の神社』JTB 日本交通文社出版事業局、1988年11月1日発行、133頁参照。

2570^円 1/2 175^円

246

2570^円 1/2 大説明

2,559P- 7/9

- ・カラー
- ・左頁の上半部に掲載下さい。



140G

写真版 419 筑前大島の小高い丘陵に鎮まる『中津宮』の社殿

130G

120G

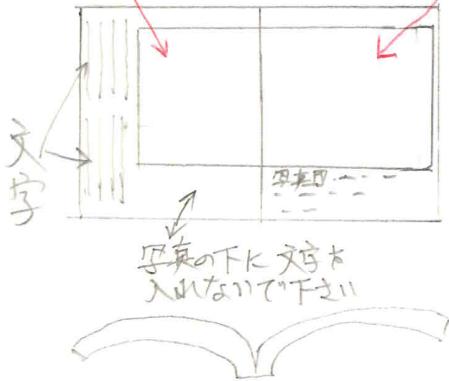
・中津宮の方角に面して立つ。

『日本100の神社』JTB 日本交通公社出版事業局、1988年11月1日発行、132頁参照。

2,5592 8/9

- カラー ^{はみだして}
- 右頁に大きく掲載

* 次頁の写真を、
左頁の ^上 ~~上~~ 半分に載せる。



* 左右頁の写真を、
可能な限り、くっつける。



(現在10月10朝)

漢主 1855

1324

1424 写真図版 420 秋季大会の初日、宗像土浦の漁船が総出で「神迎え」を行なう。

『日本100の神社』JTB 日本交通公社出版事業局 1988年11月1日発行 132~4頁参照
はたの祭り、旗や幟を飾った漁船数百隻が一団となって進む。壮観である。248P

2.559P-9/9



249

→ H4.3.30 (A) ⑤

日付、日差 2170° $2,560^{\circ}$

日本の島々 24 群棲 667° 群から集まって住むこと
大水 薙島 冬は氷が張る。

九州考 学 散 歩
し。 186° ⑤ 2564°

玄界灘 高 等 地 図 18°
⑤ 2559° 1/4 米
6.5 の 続 き。

と曹 ~~ぎ~~ 軍船の列は、掛声も勇ましく意気揚揚
と曹 ~~ぎ~~ 軍船の列は、掛声も勇ましく意気揚揚
こうしてやかて姫達は、玄海灘の真只中に
ぽつんと浮ぶ口沖ノ島（釜山の南一四五時
このみなど）の北西六〇時）に至った。周囲約四時の絶
海の孤島である。沖ノ島の取止場は南端にあつて、こ
こだけが舟がかりの場所となつてゐる。一ノ
岳といふ最高の山は海拔二四三・一メートル。常緑
樹の原生林（天然記念物）が密生し、オオミ
ズナギドリ（大水鳥）が群棲してゐる。
（九州考 学 散 歩 柴田勝彦、学生社）一八六（七頁参照）
に南を目差して増ぎ進み、口大島へに至った。
大島から倭国本土まではあと僅かの距離である。
（予め、宗像神社の口奥つ宮口・口中）
つ宮口・口辺つ宮口についで、見ておくこと
にしよう。
ごく一般的には、これらの宮の配置はついで

は胸形の辺つ宮に坐す

と述べられてゐる。

何故、曰日本書紀と曰古事記と曰古事記と曰古事記

とで、このような差異があるのかは分らない

国しかも何と驚くべきこと、宗像神社では

鎌倉時代以後、曰日本書紀と

曰古事記と曰古事記のどれとも違つて、

多紀理毘賣命を中津宮、湍津姫命を中津

宮、市杵島姫命を辺津宮に祭つてゐる

という。(「宗像神社史」(宗像神社復興期成

会、一二五頁、二四八頁、二六二頁。古代の

日本(3)九州、角川書店、三〇二頁等参照)

代後期頃、鎌倉時代(あるいは平安時

代後期)頃に、誰かが、曰日本書紀

神代上第六段本文に記載されてゐる三女神

の出生順を尊重して、

田心姫・湍津姫・市杵島姫

の順に並べ変えたのかも知れない。

そしてこの配列は、明治九年(昭和三十

二年の一時期を除いて)現在にまでも踏襲さ

れてゐるという。(「宗像神社史」(二五九頁参照)

(*)

順番

●それは、^{おき}奥つ宮^{なか}・^{なか}中つ宮^{なか}・^{なか}近つ宮^{なか}と
三女神との^{かん}関連^{かん}を示す^{しめ}①②③のうち、^いよ
り古い時代の三女神の^い配列^いを示して^{しめ}いるのは
どれ^だだろうか。^{かま}順序^{しる}
●③は鎌倉時代頃以後、現代に至るまでの三
女神の配列なのだから、^い①あるいは^い②のうち
のどちらかが古い形態を伝えて^{つた}いるように^いなる
思われる。^いとはいえず、^い①②の^いどちらか^い左式であつ
たのか定かでない、^いにわかには断定できない。
●しかし、
●①の^い日本書紀^いと^い神代上第六段一書第二と
現代^いとの間に^い全く一致点^いは無い^いが、
●②の^い古事記^い・^い舊事記^いと、^い現代^いとの
間には、^い「^い田心姫^いを^い沖津宮^いに祭^いつて^いいる^い」
という一致点がある。
●このことからみて、
●^い日本書紀^いと^い神代上第六段一書第二^いがよ
り古い時代の^い配列^いを示し、^い「^い古事記^い」
順番

と想像される。

通(とお)り(り)に祭(まつ)ら(ら)れ(れ)て(て)い(い)る(る)、
 ところ(ところ)が(が)、古(ふる)事(こと)記(き)に(に)・古(ふる)白(しろ)事(こと)記(き)の(の)記(き)載(さい)

多紀理毗売命・市杵嶋比売命・田寸津比
 売命

の
配 ~~方~~ ^を 目 ^に 矢 ^は 鎌倉時代頃の誰かか、
市杵嶋比売命と田子津比売命と加、誤

て 入 水 替 っ て 川 3 L

と思つたのかも知れない。

い
つ
の
時代
にも
誤り
と
信
に
入
る

で
ある。
だ
こ
と
を
正
さ
ず
に
お
し
な
い
人
が
い
る
も
の

そうした訳で、鎌倉時代頃に誰かが、日記

本書紀に神代上第六段本文の三女神が

「田心姫・端津姫・市杵嶋姫」

という順に並べ替えた
であうううと
と想察す

次頁
から

れる。

■ともあれ、この物語では、

へ初めて三女神が宗像の地に祭られたと思

われる辛卯年(三三一)当時には、

三女神の鎮座地は、日本書紀乃神代上第六

段一書第二に記述されているとおり、沖の方

から、

「市杵嶋姫命・田心姫命・瑞津姫命」

の順に配されていたのであらう。

と考えてみたい。

三韓征討を果して帰還する倭人達は、倭軍

の要となつて自ら戦った日市杵嶋姫命の太

きな功績をたたえる為

「玄海灘の海中にボツンと浮ぶ日沖の島」

に宮を建てて、市杵嶋姫命を祭った

のであらう。

「高瀬津嶋姫命ともいう

（か）なかる
②2557P-3/3
2561
2563

なせ
何故
2562
2.565P-1/2

小林
381
586
ハ心端

（こ）

すなわち、
市杵嶋姫命は、奥つ宮に祭られ、このため
時として瀛津嶋姫命とも称されたのだろう
と察せられる。

いかしなから
へどうしたわけで、田心姫が中つ宮に祭られ、
命が、中つ宮に祭られたのか、
瀛津姫

にっいては分らない。
①もーかーたら、極めて単純に、

「心」は、「まんなか」を意味するから、
田心姫が中つ宮に祭った、

「端」は、「端」に似ているから、
瀛津姫を中つ宮に祭った、

という（こ）となのであろうか。

② いや、そうではなく、
三女神中の長女を、真中である中つ宮に

に配し、

（こ）

H30(2018)6.26(火)~6.28(4回)

下

2,565^P-7/2

聖徳太子画像
田村円隆「聖徳太子」1/1^P

記さない。
左右の二人のうち
どちらが上座か分らない

次女を、祖先が居所としていた關越の方に
回って左方の日辺つ宮に配し、
三女を、右端の日実つ宮に配した、
とある。のかも知らないか、定かでない。

*

胸像神社とは
 胸像神社とは
 胸像神社とは

宗像神社の神宮

宗像神社は、実に不可解なことの多い神社である。

詳しくは追々述べてゆくとして、

官につぎで、とりあえず、宗像神社の神宮にふれてみよう。

① 日本書紀に神代上第六段本文に

「三女神は」筑紫の胸肩君等が祭る神

是なり

② 日本書紀にも同様に、

「三柱の神(三女神)は、胸形の君等が奉ちいつく三前の大神ぞ」とある。

③ それなのに、日本書紀に神代上第六段一書

第三には、
 「三女神は」此筑紫の水沼君等が祭る神

宇像神社 395P
「古代の日本」(3)加川
306Pに付

2,566P-2/2 紀上296P
水沼君等 2575 紀上110P注10
紀上296P注10

是なり

と記されていいる。

参考までながら、水沼君に關して

次のように解説されていいる。

水沼君は、水間君ともいい、筑紫の豪族

だ。

景行紀十八年七月条に、水沼県主とあり、

水沼県主の本拠は、和名抄に、筑後国三潯郡

へ美無万とある地であろう。

という。(「日本書紀」(上)日本古典文学大系

岩波書店、一〇頁、注一〇参照)

なるは、水沼君(水間君)は、筑紫の豪

族だ。

もつとも、

「水沼君なる氏族について」は、記紀以下の

古典に記すところが極めてえらく、その詳細

を知ることは到底できない。

という。(「宗像神社史」(下)宗像神社復興期

成会、三九五頁参照)

しか、ながら、日本書紀の中に、

7 (三女神は) 此筑紫の水沼君等が祭る神

是なり

と明記されているところを見ると、日本書紀

の編纂当時には

へ宗像神社の神官^{みぬまのきみ}は日水沼君^{ひみづぬみ}らにつ

いて、かなりよく知られていた

と察せられる。

・たぶん

へただ単に、記・紀中にその委細^{みづみづ}が記述さ

れていりただけ^{だけ}なのであろう

と思われる。

それにして、宗像神社で三女神^{さんめがは}にお仕えした

と川^{かわ}日水沼君^{ひみづぬみ}らと、日胸形君^{ひむねがたのきみ}らとは、

(1) 同時に神官職^{かみかみ}についていたのだらうか、

(2) それとも、どちらかが古い時代の神官であ

り、どちらかが新しい時代の神官だったのだ

あろうか、

と、判然^{はんせん}と一^{いっ}層^{そう}気が揉^もめる

■ 因みに述べると、日本書紀^{よみほん}は神代上第六

段の本文と一書第三とで、宗像神社の神官が

契縁 ①2571-2

判例 ①2567P ②2568P

2,568P-1/2

谷川士清 1389P ①110P ②174P

異なつてゐる点について、江戸中期の国
学者、谷川士清の『日本書紀通証』(通証)に
「丹斎曰、胸肩氏為左座、水沼氏為右座」
とある。(『日本書紀』上) 日本古典文学大系
若狭書庫、一〇頁、注一〇参照)
たが、胸肩氏が左座であり、水沼氏が右座
であつたと述べてゐるのか、分らないで
思ふな。
あるいは、水沼君と胸形君と
の二者のうち、一方が古い時代の神官であり
残る一方が新しい時代の神官なのかも知れな
い。
① もそうなら、後代の書に「水沼
君」のことが殆ど見えなないので、
形氏が散見されるころからいつて、
② 水沼君は、古い神官
胸形君は、新しい神官
なのではなからうか、と思われ
る。
語では、
定かでないが、この物

262

北九門の82° 記(四)48°位2
acc! 2570 1/2 49h

2.569P-1/2

辛卯年 331年
壬申乱 672
聖武天皇 643

遺構 1031
古い建築の残存するもの

沖ノ島

↑↑↑↑↑ 沖ノ島の祭祀遺跡についてみてみ

沖ノ島の祭祀遺跡は、奥に十九箇所にお

よび、古いものは四世紀中葉に遡る。それ以後
降古墳時代後期の六世紀末葉にわたり、一部

には七世紀のものもと推定されるものもある

という。↑↑↑↑↑ (「宗像神社史」宗像神社

復興期成会、七四七七頁、二四六頁。「古

事記」新潮日本古典集成、新潮社、四八頁参

照)

もいかたら

四世紀中葉の辛卯年(三三二)ころ、沖ノ島は

鳥全体が奥津宮の境内とされ、天照大神、日

杵島姫を祭る島として尊崇されるようになった

そして、二の時から後七世紀に至るまでの

壬申乱(六七一)までの

20x20
壬申乱 672

7世紀

263

acc! 前 49

164所次 109

2,569^P-2/3

壬申乱
2568^P-2/3
2行

辛卯年
2564^P45行

長期間^{ちがうきかん}にわたって、手厚^{てあつ}く祭祀^{さいし}が営^いまれ続け^{つづ}た。
ことを物語^{ものがたり}っているのではなからうか。
＊あえていえば、
へ日^ひ水沼^{みづぬま}君^{きみ}が、^{（七世紀）}辛卯年^{しんぼうねん}（^{（四世紀）}三三一[）]以降^{いこう}、
壬申乱^{じんしんらん}（^{（七世紀）}六七二[）]直前^{ちかぜ}迄^{まで}、沖ノ島^{おきのしま}の巨岩^{きょがん}の陰^{かげ}など、
祭祀^{さいし}を行^{おこ}なっていたのだらう。
と想像^{そうぞう}される。

天つき
改行

2.569^P-3/2

265 194 所前 2頁 8行
中津宮 坂 11行 「」 無し。 (こと
詳には、九州岩手教歩 191. 193

長期間にわたって、手厚く祭祀が営まれ続けた
ことを物語っているのではなからうかや
と思われぬ。

なお、
沖ノ島は玄海灘の洋上にうかぶ孤島で、
宗像神社三宮中の一つ、沖津宮をまつる
神域として、古くから信仰の対象となってい
る。

一九五四年に学術調査が行なわれ、御金蔵と
よばれる岩陰など、一六ヶ所で祭
祀遺跡が発見された。

沖ノ島の祭祀遺跡の多くは、沖津宮社殿を
めぐる巨岩の陰を利用して、鏡・刀剣・武具
玉類・馬具・石製横造品・金製指輪その他を
奉献したものであつた。

露天の場所も、二ヶ所だけ認められた
という。(「世界大百科事典」平凡社、へ沖
ノ島遺跡参照)

宗像大社(沖津宮)境内の宝物館に納められ

おかし 286° 109° 22' 11" 2561°

2.570°-1/2

2568°-1/2 2569°-1/2 未

2568°-2/2 2569°-1/2 未

こと

ており、いつでも見る（こと）が出来る、という。

（「九州考古学散歩」柴田勝彦、学生社、一

八五十二の二頁参照）

＊あえていえば、水沼君は、^{みづまのきみ}（^{しんほうのとし}）

三、以降、壬申（^{みづまのきみ}）直前迄、^{しんほうのとし}（^{おき}）

島の巨岩の陰などで祭祀を行なっていたのだ

ちうと想像される。

大島

さほど遠くない

■宗像郡の沿岸から海上約七^{（おき）}のところに

かぶ大島には、中津宮がある。

■もともとの中津宮には、日本書紀に神

代上第六段一書第二の記述通りに、田心姫

が祭られたのかも知れない。

■大島には、日沖津宮遥拝所^{（おき）}が古くからあり

その拝殿から神殿奥正面の窓を通して沖ノ島

を拝む（こと）ができる。（「日本書紀」上）日本

古典文学大系、岩波書店、一〇九頁、五十一

参照）

＊

$$2,570^P - \frac{3}{2}$$

新羅から船出した倭国の船団は、
 沖ノ島をおよび大
 島を終つて、
 宗像の海濱

新羅の対岸

コウヨ ケー20 20×20

267 L

紀上109'末 カン71399' 吳漢
ヒシ

版19所

2,571^P-1/3

世々1258^P
前巻③
神も教記語

宗像神社92に原文
大巻1050^P
ニ、にて

④499^P

500^P

501^P

502^P

503^P

504^P

505^P

506^P

507^P

508^P

509^P

510^P

みかた 云々2106^P
御神像
御神像
神体

以ちて邊津宮の表に置き、此の三つの表を以ちて神の體え形（御形、御神体）と成して、三つの宮に納め置きたまひて、即て隠りまき。因りて身形の郡と曰ひき。□一曰、天神え子有、四柱。兄三柱、神教弟大海命曰、汝命者爲吾等三柱御身之像、而可居於此地。便一前居於奥宮、一前居於海中、一前居於深田村高尾山邊。故號曰身像郡。云々。□後の人、改めて宗像と曰ふ。其の大海命の子孫は、今の宗像朝臣等、是なり。云々。

とある。*原文は第八章「宗像氏」の項において掲載。この逸文は、宗像神社宝物古写本宗像大昔薩御縁起（卷子本一卷）に載せるところである。*不ただし、□内の文は御縁起の裏書で、これまで一般に知られていなかった、という。（「宗像神社史」上）宗像神社復興期成会、九二頁。↑↑↑「風土記」日本古典文学大系、岩波書店、五〇六頁、注十二参照。*ここに、「宗像の大神」は三女神のことという。また、「埜門山」は宗像郡の北端、鐘ノ岬で

268 原文④4996年 沢又日④4985^Pにある

地誌録
446^P

あううかというが、異論もある。(「風土記」

日本古典文学大系、岩波書店、五〇六頁「宗

像神社史」(上)宗像神社復興期成会、九二頁。

一〇八頁等参照)

●それにして、この西海道風土記逸文には、

「即て隠りまじき」

と記されてゐるが、——誰がお隠れになつ

たというのだろうか。

(1) 市杵嶋姫命か、

(2) 最初に祭られた「三女神」のことか、

(3) 最初の神宮「水沼君」か、

(4) 最初の「三女神」および最初の神宮「水沼君」のことか、

などなどいろいろの場合が考えられる。

*

なるほど、確証はないが、この物語ではとり

あえず、西海道風土記逸文の冒頭部分を

次のように解釈してみた。

④ $2570^{\circ} - \frac{2}{2}$

きたのてはなかうか。(神代紀上第六段一書)

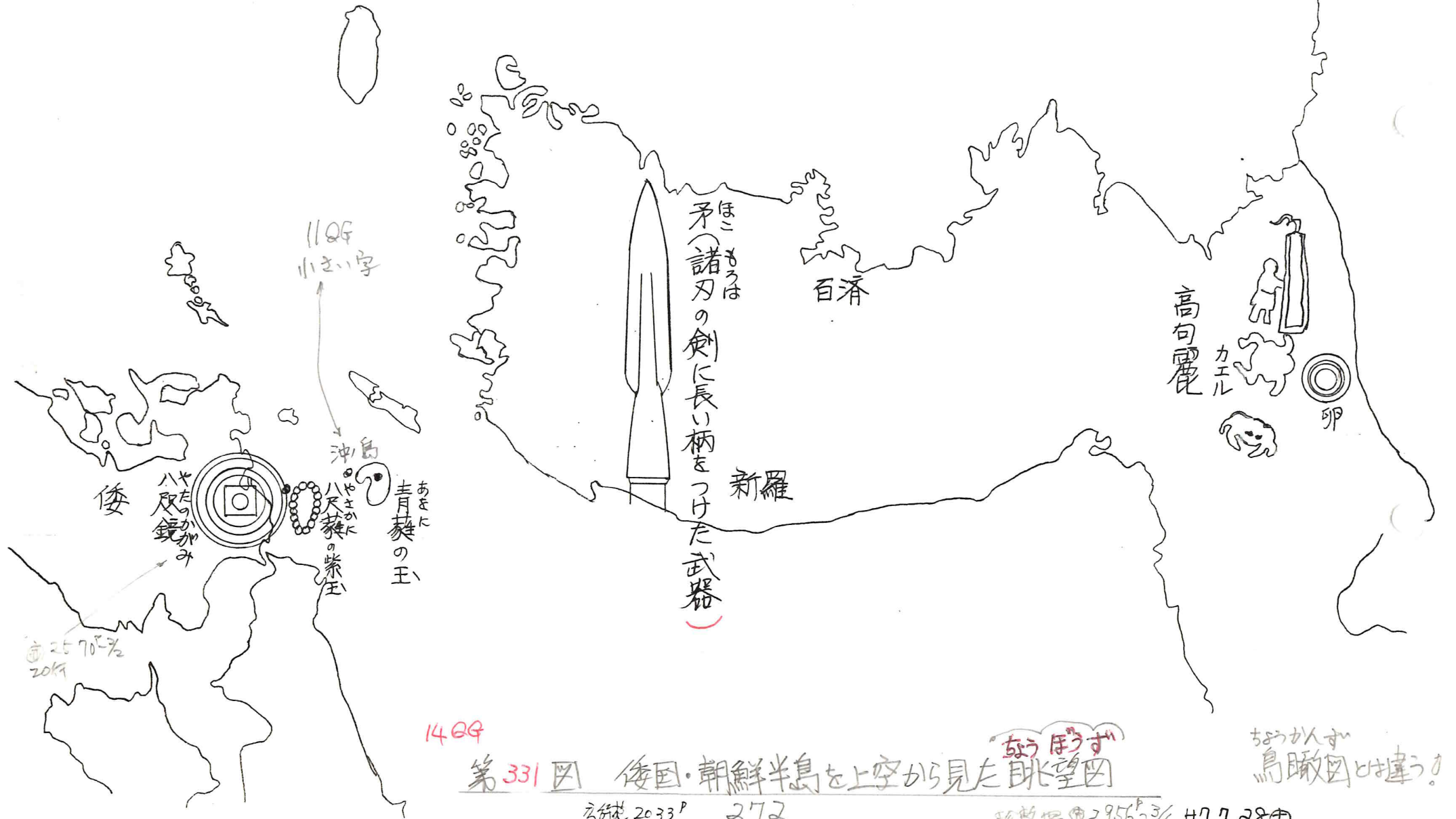
2571
-1/3
4 1/2
5 1/2
6 1/2
7 1/2
8 1/2
9 1/2

2513-1/2 日本文学 536P 配文後/伝 2561P 2570P 2572P-1/3 2520P 紀上338P 2530P 179P 第197

さてここに、朝鮮半島と北九州とを一望の
もとに見渡せる上空から、
はるか眼下を見おろしてみよう。
辛卯年（三三一）当時、何が見えたであろ
うか。
新羅王の門には、矛が樹てられ、その後
葉の印とされた。（神功皇后摂政前紀。第
四十一章へ三韓征討の項において既述）
二方、新羅国の南にひろがる海原（玄海灘）
の対岸、宗像の辺津宮には、八咫鏡が
配された。
更に、玄海灘の海中に浮ぶ大島の中津宮に
は、八咫鏡の紫玉、沖ノ島の奥津宮には
青鏡の玉が置かれた。
つまり、
へ矛と鏡とか、海をはさんで幾久
く向かい合い、その間に広がる海中には
八咫鏡の紫玉、および青鏡の玉が点々と
連らなつた。

2572^P-2/3

*頁の上半部に大きく掲載下さい。



146G

第331図 倭国・朝鮮半島を上空から見た眺望図

文政 2033^P 272

なうほうす

珍勢塚 2956^P-3/6 H7.7.28⑤

ちやうかんす
鳥瞰図と違ふ!

と解かいされる

木
な
あ、
口
矛
凸
は、
人
諸
刃
の
劍
に
長
い
柄
を
付

けた武闘
のこ
である。
（「
広辞苑
」
矛盾

参照

すなわち
後代に
三種の神器
と称される

と
に
な
る
日
鏡
凸
・
凹
剣
凸
・
凹
玉
凸
加
、
|

この辛卯年（三三一）当時、倭

国と朝鮮半島とを掛け渡すかのようにな配され

光り輝いて、
人々の心の内に鮮烈な印象を与

え
た
の
~~ひ~~
う
う、
と推察
し
小
る
。

どうも、京像神社の、ハズ鏡ハズカミの、外周がハズ（一四四半）はかりなのか

ところ、宗像神社の社殿について、特筆

す
へ
き
こ
と
か
あ
る

7 宗像神社
・ 第一宮邊へ
津宮の
社の
敷は、
他社

著しく異なり、
北
向き
に
、
玄海
の荒波

交 938
 臣 大
 ア
 月 遠
 羊 一
 二 月
 針 大
 甘 大
 三 三
 公 四
 う 十
 二 二
 更 大
 ア 三
 の 〇
 ハ 十
 才 才

足
一
一
止
＜
草
魚
に
業
て
。
よ
う
に
建
て
ら
れ
た

1
3
L

と川う。へ「日本社幸大観」名著刊行会入宗

像神社
参照
福

察するところ
八咫鏡
を安置
する邊
津宮

は、
新羅國の弓矛と相對面するよう

下
意
因
て
北
向
き
に
建
て
う
水
た
の
で
あ
う
う

④

と思われ。と
鏡と矛とが、海をはさんで互に向
きあつてゐる。素敵敵とは、
「鏡は矛を写し、矛は鏡に照らされて強く
輝くのだという。」
「玉か点々と祀られて、鏡と矛とをしつ
かり繋いでゐるように思えるのも、ほほえ
ましいね。」
人々は様々に口にするのだった。
こうして、天照大神（神功皇后）の赫
々たる戦勝の功績は後の世にまでも未長く
称えられ続けてゆくことになつたのであろう。
※尚、宗像神社の由緒によると、
神功皇后新羅を伐ち給ひや、此の神威靈
を現し給ひより以来、靈驗甚だ多く、因り
て朝廷御祈りある毎に必ず使を遣して奉幣せ
らるる例となれりし
という。（「日本社寺大観」神社編、名著刊
行会、五三五頁へ宗像神社参照）

H30(2018)6.27(水)~6.28(4回)
 H31(2019)2.6(日)~2.6(3回)
 令和元(2019)7.13(土)~7.13(3回)

元 晋は 265~420 *東晋が宋が不明。
 1140 西晋 265~316
 東晋 317~420

2,573^P - 7/2

紀上378^P 380^P
 日本社 536^P

はらう 名 号うん 元 1 はらう 元 157^P
 所望 1125 奉 2023 甚だ 180^P 威霊 威ある神霊
 御新元 262^P

F 7/3
 7/3

年二月是の月条参照)
 (応神紀三十七年二月条、同四十

より、吳(中国の江南の地)より、
 7 きたエ女兄媛を奉った

また、応神紀四十一年二月条によると、
 7 胸形大神(三女神であらう)の所望に

推察される。

後、宗像神社は朝廷にとつて非常に重要なと
 ころと考えらるようになった。たの

ともあれ、神功皇后が新羅から帰還された以

市杵嶋姫

2523^P
 101^P

2571^P - 3/2^P
 2574^P 1/2 4^P